

## 同志社大学所蔵「源語」の紹介

— 翻刻・現代語訳・解説 —

本学所蔵の「源語」は源氏物語の絵巻で、一帖につき和歌短冊（その巻で詠まれた和歌を短冊に記したもの）と絵が一枚ずつあり、五四帖が揃った卷子本である。上下二巻に分かれ、上巻は第一帖（桐壺の巻）から第二五帖（蜜の巻）までで表紙の外題は「源語上」、下巻は第二六帖（常夏の巻）から第五四帖（夢浮橋の巻）までで外題は「源語下」と墨書されている。第二九帖（行幸の巻）と第三一帖（真木柱の巻）が逆に置かれている以外は、源氏物語の巻の順に並んでいる。第三一・三〇・二九帖は連続して描かれているので、その錯簡は継ぎ誤りではない。卷子本の縦の長さは上下巻とも二五・六センチ、和歌短冊は縦二四・二、横三・二センチで近世後期写と見られる。なお当作品は本学図書館デジタルコレクションで閲覧できる。また本作品の解説は別稿（同志社大学所蔵「源語」解説）、「同志社国文学」九五、二〇二一年（二月）を留意している。

岩 坪 健

### 凡例

- 一、各帖の冒頭に巻数と巻名を示す。例えば「1桐壺」の1は第一帖を表す。桐壺は桐壺とも書くが、書写された通りに翻刻する。ただし第三九帖（夕霧の巻）のみ巻名を欠くので、補った。また行幸・真木柱の巻は、現状の順に並べた。各帖とも①～⑥の項目を設け、以下その内容を示す。
- 一、①は詞書の翻刻で改行は／、読めない箇所は□で表す。一部の和歌（11・22・24・30・36・39・43・47・52）は下から上に書かれているが、その場合も上から順に翻刻した。
- 一、読解の便宜を図り、①に該当する新編日本古典文学全集（以下、新編全集と略称する）の本文を②に引用して、末尾の（ ）内に新編全集の冊数と頁数を書く。例えば（新編全

集①三五頁）は第一冊の三五ページを示す。

一、①と②とで本文に異同がある場合も、③には①の現代語訳を載せる。理解を助けるため、（ ）内に主語や説明などを補足する。

一、④は①の和歌が詠まれた状況説明、⑤は絵の場面説明、⑥は補足説明。和歌と絵で場面が異なる帖が多いので、⑤にも新編全集のページを記す。

一、各巻の末尾に担当者名を（ ）内に記す。担当者は全員、岩坪ゼミの学部生であり、各人が提出したものに岩坪が全面的に加筆したので文責は岩坪にある。

#### 1 桐壺

① 尋ねゆくまほろしも哉つてにても／玉の有かをそことしるへく

② たづねゆくまほろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく（新編全集①三五頁）

③ （亡くなった桐壺更衣の魂を）尋ねて行く幻術士がいればなあ。人づてでも（桐壺更衣の）魂の居場所をそこと知ることができるのに。

④ 桐壺帝が、桐壺更衣を偲んで詠んだ和歌。

⑤ 鴻臚館（現代の迎賓館）にて、外国の人相見が光源氏の将来

を占う場面。光源氏は冠をかぶらず少年姿。そばに控えて黒い袍ほろを着た束帯姿は、光源氏を連れてきた右大弁。簀子すのこ（縁側）に座るのは人相見で、手に持つのは唐風の団扇か。（新編全集①三九頁）

⑥ 源氏物語絵では通常、鴻臚館の床は市松模様の石畳で描かれる。また絵の柱は四角いが、平安時代の柱は丸い。

（岩坪健）

#### 2 帚木

① は、き、の／こ、ろをしらて／そのはらの／みちにあや／なくまとひ／ぬるかな

② 帚木の心をしらでその原の道にあやなくまどひぬるかな（新編全集①一一二頁）

③ （近づけば消えてしまう）帚木のように、あなた（空蟬）の心を知らずに（近づこうとして）、園原の険しい道（恋路）に訳も分からず迷い込んでしまったなあ。

④ 光源氏が、空蟬を偲んで詠んだ和歌。

⑤ 五月雨が続く中、宮中にある光源氏の宿直所に頭中将、続いて左馬頭と藤式部丞が物忌みに籠るため参上し、「雨夜の品定め」〔女性談議〕をしている場面。源氏物語絵では貴人は几帳の側にいることが多いので、白い直衣姿は光源氏、水色の直衣は頭中将、正装の黒の袍を着て対面しているのが左馬頭。最も

身分の低い藤式部丞は少し離れている。(新編全集①五八頁)

⑥平安時代は板床で、貴人が座る所にだけ畳を置く。絵のように畳を敷きつめるのは、室町時代後期に書院造になってからのこと。

### 3 空蟬

(浜本裕)

①うつせみの身をかへて／ける木のもとに／なを人からの／なつかしき哉

②空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな(新編全集①一二九頁)

③蟬が抜け殻を残して去るように、あなたは小桂を残して去ってしまった。蟬がいた木の下でなお、あなたを懐かしく思っている。

④光源氏が、空蟬を偲んで詠んだ和歌。

⑤中川の邸にて空蟬と継子の軒端萩が碁を打っているのを、光源氏が御簾の隙間から覗き見る場面。物語の描写によると、光源氏から見て背を向けているのが空蟬。(新編全集①一一九頁)

⑥暑くて風通しをよくするからか几帳の帷子ななびらが横木に掛けてあったので、源氏は覗き見ることができた、と物語には書かれているが、絵に描かれた帷子は垂れている。軒端萩が右手を挙げているのは、碁石を数えているのであろう。

### 4 夕顔

(浜本裕)

①よりにこそそれかともみめたそかれに／ほのくみつる／花の夕かほ

②寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのほの見つる花の夕顔(新編全集①一四一頁)

③近寄って(私が)誰であるか見てください。黄昏時にほんやりと見た花の夕顔(のような私の顔)を。

④夕顔に対する、光源氏の返歌。

⑤光源氏が訪れた乳母の隣家で、扇に載せた夕顔の花を隨身が受け取る場面。源氏が乗っている牛車のそばに控えている従者のうち、烏帽子をかぶっていないのは牛飼童。(新編全集①一三六頁)

⑥夕顔の花が散った後の実は、干して干瓢(かんびょう)にするので、庶民の家には植えられたが、貴人の邸宅にはなく、光源氏は初めて見て興味を抱き花を所望した。

(浜本裕)

### 5 若紫

①はつ草の／若葉の／うへをみ／つるより／旅ねの／袖も露そ／かはかぬ

②初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ

(新編全集①二二六頁)

③初草の若葉のように可愛らしい人(若紫)を見てからというもの、(私の)旅寝の衣の袖も(恋しさの)涙で乾くことがない。

④源氏が、北山で見つけた若紫に宛てて詠んだ和歌。

⑤北山にいる光源氏を迎えに来た頭中将たちと桜のもと、水辺で酒宴が始まり合奏する場面。物語によると画面の右から隨身が箏篳、頭中将が横笛、「すき者」が笙を担当した。白い直衣姿の光源氏は病み上がりのせいか苔むした岩に寄りかかり、赤い僧衣を着た僧都に琴を勧められて演奏した。(新編全集①二二三頁)

⑥幕末に品種改良されたソメイヨシノが現われるまではヤマザクラが主流で、赤褐色の葉と同時に花が咲く。「山の桜はまだ盛りにて」(二〇〇頁)とあり、描かれた桜は満開で葉も見えない。物語には「花のかげ」「岩隠れの苔の上に並みあて、土器まある。落ちくる水のさまざま、ゆゑある滝のとなり。」(二二三頁)とある。

#### 6 末摘花

(星野友里江)

①里／わかぬ／影をは／みれと／行月／の入さの／山を誰か／たつぬる

②里分かぬかげをば見れど行く月のいるさの山を誰かたづぬる  
(新編全集①二七二頁)

③里を分け隔てなく照らす月影(光源氏)を見たとしても、その月が入っていく山(末摘花邸)まで誰が訪ねるだろうか。

④光源氏が、後をつけてきた頭中将に詠んだ和歌。

⑤年末に宮中の宿直所で、末摘花を紹介した大輔命婦が光源氏に、末摘花からの手紙と直衣を届けた場面。光源氏は左手に手紙を持ち、大輔命婦は正月用の直衣を見せている。(新編全集①二九八頁)

⑥直衣は物語本文では衣裳箱に入れて贈られたとあるが、絵では省略されている。

(星野友里江)

#### 7 紅葉賀

①物おもふに立まふべくも／あらぬ身の袖うちふりし／こゝろしりきや

②もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや  
(新編全集①三二三頁)

③思い悩んで舞うこともできない身の私(光源氏)が、袖を振って舞った(あなたを思慕する)気持ちは分かっただけでしたか。

④光源氏が、試楽を見た藤壺に送った和歌。

⑤光源氏が頭中将と共に青海波を舞う場面。試楽は清涼殿の東庭で行なわれたが、そこにはない紅葉が描かれているので、朱雀院での本番であろう。(新編全集①三二四頁)

⑥物語では冠に紅葉(後に菊)を挿しているが、この絵には描かれていない。

### 8花宴

(星野友里江)

①深き夜の哀を／しるも／入月のおほろけならぬ／契とぞ思ふ  
②深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りとぞ思ふ(新編全集①三五六頁)

③深まる夜の風情を深く心に感じる(私たち二人)が、入り方の朧月に魅せられて巡り合ったのも(その朧月のように朧気ではない)並々ならぬ縁ゆえと思います。

④光源氏が、弘徽殿の細殿で出会った女君(朧月夜の君)に詠んだ和歌。

⑤花の宴も終わった夜、酔心地の光源氏が戸締りの堅い藤壺に諦めきれず、開いていた弘徽殿の細殿に立ち寄る。そこで「朧月夜に似るものぞなき」と歌いながら歩いてくる美しい人(朧月夜の君)と出逢う場面。女君が手に持つ扇は翌朝、別れ際に逢瀬の記念として取り換えることになる(新編全集①三五八頁)。簾には鉤丸緒(簾を巻き上げて懸けて置く金銅製の鉤を

つける丸組の緒)が見られるが、国宝「源氏物語絵巻」には見当たらないため、紫式部の時代に使用されていたかは不明である。

⑥絵は光源氏のみが女君に気付いているため、和歌の場面より少し前の情景である。「二月の二十日あまり、南殿の桜の宴させたまふ。」(①三五三頁)とあり、絵にも桜と二十日過ぎの月が描かれている。

### 9葵

(伊藤真利那)

①かけをのみみたらし／川の流れなきに／身のうき／ほとそいと、／しらる、

②影をのみみたらし川の流れなきに身のうきほどぞいとど知らる(新編全集②二四頁)

③姿を映しただけで流れ去ってしまう御手洗川のように、過ぎ去るあなたが薄情なので、(遠くからあなたの姿を拝見しただけの)わが身の不幸せが身に染みて分かってきます。

④正妻に礼儀を尽くして通り過ぎる光源氏の姿を見た六条御息所が、源氏に気づかれず遠くから見ているしかない己の(おれ)みじめさを嘆く歌。

⑤新斎院の御禊の日、行列に加わる光源氏を一目見ようと六条御息所は人目を忍んで来た。そこに後から、光源氏の正妻(葵

の上)の車も来た。正妻の権勢を笠に酔った従者たちが御息所の車を無理やり立ち退かせた結果、御息所は車を破損されて世間に忍び姿をさらした。(新編全集②二二頁)

⑥「車争い」の場面は多く描かれたが、他の絵と比べると従者たちは落ち着いている。源氏物語絵は江戸時代になると婚禮道具の一つになり、荒々しい描写は避けられたのかもしれない。

(伊藤真利那)

10 榊

①乙女子か／あたりと／おもへは／さかき／葉の／香をなつかしみに／とめてこそ／おれ

②少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみにとめてこそ折れ(新編全集②八七頁)

③(神に仕える)斎宮がいるあたりと思うと、榊葉の香りが慕わしく思えたので、尋ね求めて折ってきたのです。

④六条御息所の歌「神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ」に対する、光源氏の返歌。

⑤晩秋、伊勢への出発が迫る六条御息所に逢うために光源氏は野宮を訪れる。御息所は几帳に囲まれ、光源氏は一段低い簀子にいます。光源氏が御簾の下をくぐらせ榊葉を差し入れ、歌を交わす場面。黒木の鳥居と小柴垣に秋の草花は、野宮の哀愁を表現している。(新編全集②八五頁)

⑥巻名の榊は神事にも使われ野宮にふさわしい景物であるが、光源氏が榊葉を差し出すときには常緑の葉に不変の思いを重ねている。

(伊藤真利那)

11 花散里

①里を／たつねて／そとふ／かしみ／ほと、きす／花ちる／たちはなの／香をなつ

②橘の香をなつかしきほととぎす花散る里をたづねてぞとふ(新編全集②一五六頁)

③橘の香りを懐かしんで、ほととぎす(光源氏)は橘の花が散るこの里を探して訪れました。

④光源氏が麗景殿女御(桐壺帝の女御)と話し、亡き桐壺帝を思い出しながら詠んだ和歌。

⑤麗景殿女御の邸で光源氏が時鳥を聞き、昔話をする場面。(新編全集②一五五頁)

⑥物語では橘が描写され絵にも描かれるが、この絵は柳である。柳は物語には登場せず、写し崩れ(転写を重ねたため橘が柳になった)、あるいは下図の樹木を柳と見たからであろうか。

(上嶋由莉)

12 須磨

①うきめかる  ひやれ／藻しはたるてふ／須

磨の浦にて

②うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて（新編全集②一九四頁）

③浮き海布（浮いている海藻）を刈る伊勢の国の海人ではないが、憂き目にあっている私（六条御息所）のことをお察しください。海藻に海水をかけるように、涙を流しているという須磨の浦で。

④伊勢にいる六条御息所が、須磨にいる光源氏に送った和歌。

⑤光源氏が沖を行く舟を眺めている場面。光源氏は立ち、後方に供人が二人控えている。（新編全集②二〇一頁）

⑥物語には舟のほか雁が飛び、光源氏は「白き綾のなよやかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣」（新編全集②二〇一頁）とあるが、絵は舟だけで衣の色も異なる。

（上嶋由莉）

13 明石

①海にます神のたすけに／か、らすは塩のやをあひに／さすらへな／ま／し

②海にます神のたすけにかからずは潮のやほあひにさすらへなまし（新編全集②二二八頁）

③海にいらつしやる神の御助けによらなかつたならば、（私は）潮が寄り集まる沖合に漂っていたことだろう。

④光源氏がいる須磨を嵐が襲い、多くの海人が集まり高潮について話すのを聞いて、光源氏が神に感謝して詠んだ和歌。

⑤八月十三日の夜、光源氏が馬に乗り、明石の君のもとに向かう場面。十三夜の月が出て、光源氏は都がある方を振り返るように描かれている。ほかの三人は括袴くくりばかまで、先頭を歩く童は守り刀を持つ。（新編全集②二五五頁）

⑥この場に少年がいたとは物語には書かれていないが、源氏物語絵では貴人のお供に刀を肩に掛けた少年はよく描かれた。

（上嶋由莉）

14 漕漣

①兼て／より／へたてぬ／中と／ならはね／と／わかれはおしき／ものにそ／有ける

②かねてより隔てぬなかとならはねど別れは惜しきものにぞありける（新編全集①二八八頁）

③以前から、隔てのない仲として親しんできたわけではないが、別れは惜しいものであるなあ。

④光源氏が明石の姫君のために、明石へ遣る乳母に送った歌。

⑤光源氏一行が住吉へ参詣したとき、偶然、住吉に詣でる明石の君の舟を見かけ、光源氏は明石の君への思いを古歌に託して口ずさむ。それを聞いた惟光は、車内にいる光源氏に硯と筆を渡す。（新編全集②三〇六頁）

⑥絵では牛車から顔を覗かせた光源氏に、従者の惟光が旅行用の硯と筆を手渡ししている。沖には明石の君が乗った船が見える。

15蓬生

(木戸口瑠華)

①尋ねても我こそとはめ道もなき／ふかきよもきか／もとの／こゝろを

②たづねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもとを(新編全集②三四八頁)

③探し求めていって、私からお見舞いしよう。通る道もないほど深く生い茂った蓬のもと(の屋敷)にいる、昔から変わらない(末摘花の)心を。

④光源氏の独泳歌。惟光から末摘花の様子を聞き、庭に蓬が生い茂っている様子を見て、末摘花に薄情であったと反省して詠んだ歌。

⑤先頭を歩く惟光に馬の鞭で露を払わせながら、光源氏は蓬が深く生い茂った末摘花邸に入る。従者が傘を差しているのは、木からしたり落ちる雫で濡れないようにするため。(新編全集②三四八頁)

⑥右下の門の屋根も左上の邸宅も傷みが甚だしく、庭も雑草が生い茂っている。

16関屋

(木戸口瑠華)

①ゆくとくとせきとめかたき／涙をやたえぬ清水と人は／みるら／む

②行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ(新編全集②三六一頁)

③行きも帰りもせき止め難い私の涙を、絶えず湧き出る(逢坂の関の)清水だと、あなたはご覧になるのでしょうか。

④逢坂の関で、空蟬は光源氏の車と出会い、二人の関係を思い返して詠んだ歌。

⑤光源氏は石山寺へ参詣する途中、逢坂の関で帰京する空蟬と偶然遭遇する。空蟬らは道を空け、車を木陰に入れてやり過ごす。(新編全集②三六〇頁)

⑥空蟬が光源氏と一度だけ会ってから、一二年後のことである。

17絵合

(木戸口瑠華)

①うきめ／みし／その／おりよりも／今日は又／過にしかたに／帰る／涙か

②うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か(新編全集②三七八頁)



③「浮き海布うきう」（海に浮かぶ海草）のように「憂き目」を見た、あの（須磨・明石にいた）頃よりも、（この絵日記を見た）今日はまた過去に戻ったようで涙が流れます。

④光源氏が須磨で描いた絵日記を紫の上に見せた際に、光源氏が詠んだ和歌。

⑤冷泉帝の御前で、梅壺と弘徽殿ひろみせが絵合えあわせを行っている場面。それぞれが収集した絵を納めた箱が置かれ、帝から見ると左に光源氏（梅壺の養父）、右に権中納言（弘徽殿の実父）が控え、絵に精通した女房たちが居並ぶ。（新編全集②三八五頁）

⑥帝と二人の女御は顔が隠れているが、皇族をそのように描くのが江戸時代に定着した。

（小林拓成）

#### 18 松風

①契りしにかはらぬことの／しらへにてたえぬ心の／ほとはしりきや

②契りしに変わらぬことのしらべにて絶えぬ心のほどは知りきや  
（新編全集②四一四頁）

③約束を交わした時と変わらない琴の演奏を聞いて、（明石にいた頃から）絶えない（あなたへの）想いの深さは分かったださいましたか。

④光源氏と明石の君が再会を果たした日の夜、明石での別れの

際に形見にと残した琴を、光源氏が再び弾いて詠んだ和歌。

⑤上京して大堰の山荘に住んでいる明石の君が所在なさを紛らわすため、光源氏の形見の琴を弾くと、それに音を合わせるように松風が吹いてきた。側には母の尼君と娘の姫君がいる。

（新編全集②四〇八頁）

⑥物語では琴ことばの琴ことば（七絃、琴柱なし）で、絵に描かれたのも琴柱はないが、絃は十本ぐらい見える。

（小林拓成）

#### 19 薄雲

①入日さす峯にたなひくうす雲は／もの思ふ袖に色やまかへる

②入日さす峰にたなびく薄雲はもの思う袖に色やまがへる（新編全集②四四八頁）

③夕日が射している峰の上に薄くたなびく（薄墨色の）雲は、悲しみにくれている私の喪服の袖に色を似せているのだろうか

④光源氏が、幼少期から思いを寄せていた藤壺の宮の死を悼んで詠んだ和歌。

⑤明石の姫君を二条院へ迎え入れるために訪れた光源氏と、姫君を自ら抱いて車に乗せようとしている明石の君を描く。（新編全集②四三三頁）

⑥「雪かきくらし降りつもる朝あした」（四三三頁）のあと光源氏が訪れ（「雪すこしとけて渡り」四三三頁）、二条院に戻った時は

「暗うおはし着きて」(四三四頁)とあるので、絵の左上に見えるのは月ではなく太陽であろう。

(小林拓成)

20朝顔

①みし／折の露／わす／られぬ朝かほの／花の／さかり／は  
過や／し／ぬら／む

②見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬら  
ん(新編全集②四七六頁)

③見た時から少しも忘れられない朝顔(姫君)の花の盛りは、  
もう過ぎ去ったでしょうか。

④光源氏が相手にしてくれない姫君に、皮肉を込めて送った和  
歌。

⑤大きな雪玉を作っている童女たちを眺め、談笑する光源氏と  
紫の上を描いた場面。屋根にも庭の松にも雪が降り積もり、火

鉢が室内に置かれている。(新編全集②四九〇頁)

⑥物語では童女たちの人数は書かれていないが、絵では三人が  
多い。

(金藤伸太郎)

21少女

①かけきやは川せの／浪もたちかへり君かみそきの／ふちのや  
つ／れを

②かけきやは川瀬の波もたちかへり君かみそきのふちのやつれ  
を(新編全集③一七頁)

③このようになるとは思いつかなかったことよ。賀茂の川瀬の  
波が寄せては返るように御禊ごけいの日が巡めぐってきて、あなたが除服  
の禊みそぎをされるとは。

④斎院だった朝顔の姫君に、光源氏を送った和歌。御禊の日に  
斎院は賀茂川で身を清めるが、前年に父を失い斎院を退いた朝  
顔の姫君は、まもなく喪が明け喪服を脱ぐ。

⑤大柄の童女が箱の蓋に秋の花や紅葉を載せて、紫の上へ持っ  
ていく場面。(新編全集③八一頁)

⑥光源氏が建てた六条院には四季の御殿があり、秋の御殿に住  
む梅壺中宮(光源氏の養女)から、春の御殿の紫の上への贈り  
物である。几帳に挟まれたのが紫の上であろう。

(金藤伸太郎)

22玉鬘

①如何なる／すちを／たつね／来／つらむ／恋わたる／身はそ  
れならて／たま／かつら

②恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすぢを尋ね来つ  
らむ(新編全集③一三二頁)

③(亡き夕顔を)恋い続けるこの身(光源氏)は変わってしまったが、(夕顔の遺児である)玉鬘はどのような縁で私を尋ね

てきたのだろうか。

④光源氏が夕顔・玉鬘の親子を思つて詠んだ和歌。第二句が①と②で異なり、「身はそれなれど」は「身は昔のまままで変わらないが」と訳す。

⑤光源氏が女性たちに贈る正月用の晴れ着を、几帳の側にいる紫の上が見ている場面。光源氏が選んだ衣装は、緑色の上着を着た女房が衣箱などに入れて整えている。(新編全集③一三四頁)

⑥光源氏と紫の上の仲睦まじい様子を描いたように見えるが、選定している衣装は他の女性たちへの贈り物で、紫の上の胸中は穏やかではない。また光源氏には衣装の着こなしで、女性たちの器量を量る思惑もある。

(金藤伸太郎)

23初音

①薄氷／とけぬる／池の鏡に／は／世に／たくひなき／影そ／ならへる

②うす氷とけぬる池の鏡には世にたくひなきかげぞならべる  
(新編全集③一四五頁)

③池の薄氷が溶けて鏡のような池の面には、この世に二つとない(幸せな私たちの)影が並んで(映つて)いるなあ。

④光源氏が側にいる紫の上に向けて、夫婦の縁を詠み寿いだ和

歌。

⑤六条院の正月、光源氏が紫の上と鏡餅の祝いをする場面。  
(新編全集③一四四頁)

⑥池の岩に立つ二匹の鳥は、夫婦和合を象徴する鴛鴦おしどりである。庭に咲く紅梅の二本の枝も、光源氏と紫の上を暗示するか。

(小谷杏美)

24胡蝶

①秋まつ／むしは／花その、／こてふを／さへや下草に／うとく／見るらむ

②花そののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ  
(新編全集③一七二頁)

③春の花園(紫の上の春の御殿)の胡蝶をまで、下草に隠れて秋を待つ松虫(秋好中宮)はお気に召さずご覧になるでしょうか。

④紫の上が秋の御殿に住む秋好中宮に、春の素晴らしさを詠んだ和歌。

⑤秋好中宮が催した法会に、紫の上が鳥と蝶の装束をした童女四人ずつを使者として送った場面。八人の童女のうち左の四人が鳥で迦陵頻(極楽の鳥)の舞装束、右の四人が蝶で胡蝶楽の舞装束である。

⑥紫の上は秋好中宮とかねてから春秋の優劣を競い、今回は21

少女の巻で秋の草花を贈られたお返しでもある。物語では鳥は銀の花瓶に桜を、蝶は金の花瓶に山吹を挿して持つとある（新編全集③一七一頁）。絵に描かれた銀の花瓶が空になっているのは、花をお供えした後であろうか。画面左下には童女たちが乗ってきた船が描かれ、舳先には想像上の鳥である鷓の首が飾られている。本来は龍頭鷓首というように、龍の頭が付いた船と一对で用いられる。

（小谷杏美）

25 蛭

① 鴟とりに影をならふるわかこまは／いつかあやめにひきわかるへき

② にほじりに影をならぶる若駒はいつかあやめにひきわかるべき（新編全集③二〇九頁）

③ （雌雄並んで離れない）鴟鳥にせどりのように（あなたと）影を並べる若駒（のよな私）は、いつ菖蒲（のよなあなた）と別れることがあるだろうか。

④ 光源氏が花散里へ返した和歌。五月五日に菖蒲の根を引き抜く風習があった。

⑤ 螢兵部卿宮が玉鬘（光源氏の養女）を訪ねた場面。（新編全集③二〇〇頁）

⑥ 物語では光源氏が几帳かたがひらの帷子かたびらを上げて放った螢の光で、宮は

玉鬘の美しい姿を見るが、絵に蛭むが描かれないのは写し崩れ（転写を重ねて無くなること）か、あるいは蛭が放たれる前か。

（小谷杏美）

26 常夏

① なてしこの床なつかしき／色をみは／もとのかきねを人や／尋ね／む

② なでしこのとこなつかしき色を見ればもとの垣根を人やたづねむ（新編全集③二二三頁）

③ 撫子の花のように可愛らしく、いつまでも変わらず心惹かれるあなた（玉鬘）をご覧になれば、（撫子の咲いていた）元の垣根（あなたの亡き母である夕顔）について、父君（玉鬘の実父である内大臣）は（私に）尋ねることでしょう。（だから私は内大臣に、あなたのことを話せないのです。）

④ 光源氏が養女の玉鬘に、思いを秘めて詠んだ和歌。

⑤ 近江の君と侍女の五節の君が双六に興じるのを、内大臣が襖の間から覗く。光源氏に対抗すべく迎えとった近江の君だったが、その品のない様子を見て、内大臣は落胆する。（新編全集③二四二頁）

⑥ 絵で部屋むらの奥に座っているのが近江の君であろう。

（守賢大）

27 篝火

①かゝり／火に／立／そふ／恋の／煙／こそ／よにはたえせぬ  
／ほのほなり／けれ

②篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ  
（新編全集②二五七頁）

③篝火と一緒に立ち昇る恋の煙こそが、いつまでも消えること  
のない（あなたを想う）恋の炎なのです。

④光源氏が玉鬘を想って詠んだ和歌。

⑤部屋の中では、養父の光源氏が玉鬘に対し、親しげに寄り添  
う姿が見て取れる。遣水の傍にいる男は、光源氏に篝火を明る  
くするよう頼まれた右近大夫であろう。（新編全集②二五六頁）

⑥篝火に映える玉鬘の美しさに、光源氏は恋心を募らせる。明  
かりによって玉鬘が照り映えるという設定は25螢の巻にも見ら  
れ、玉鬘の美しさを印象付ける一つの表現の型と言えよう。

（守賢大）

### 28野分

①下露に／なひか／まし／かは女郎花／あらし風には／しほれ  
／さら／まし

②した露になびかましかば女郎花あらし風にはしをれざらまし  
（新編全集③二八〇頁）

③木の下露になびいていたならば、女郎花は荒々しい風にしお  
れることはないだろうに。（あなたが私を受け入れてくれれば、

困惑することはありませんよ。）

④光源氏が玉鬘を愛しく想って詠んだ和歌。

⑤源氏が玉鬘を訪れた場面。養父の光源氏が馴れ合いを求めた  
ため、玉鬘は困惑する。二人の間の距離や顔の高さの違いが、  
玉鬘の困惑や拒絶を印象付ける（新編全集③二八〇頁）。几帳  
は野分の風で膨らんでいる。

⑥和歌が詠まれた場面は、物語では夕霧（光源氏の子息）の視  
点で語られるが、絵には垣間見る夕霧の姿は見当たらない。版  
本の挿し絵にも一組の男女が描かれ、光源氏が秋好中宮または  
明石の君を見舞った場面とも考えられる。

（守賢大）

### 29真木柱（第三一帖）

①今はとて／宿かれぬとも／なれきつる／檣の／はしらは／我  
を／わするな

②今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな  
（新編全集③三三三頁）

③今は（これまでだ）と我が家を離れたとしても、慣れ親しん  
できた真木の柱は私を忘れてくれるな。

④真木柱の姫君が今まで住んでいた父親の家を離れ、式部卿宮  
（母方の祖父）の元へ連れていかれるときに詠んだ別れの歌。

⑤真木柱が普段寄りかかっていた柱のひび割れた所に、笄こしがらの先

を使つて檜皮色ひわだの紙に書いた和歌を押し込む場面だが、絵には紙も笄も描かれていない。(新編全集③三七三頁)

⑥真木柱が着ている小桂の絵柄は、中心部が赤で花びらが白い花が流水に浮かんでいる。十一月『新編全集』③三五二頁)か十二月のことなので、その花は椿であろうか。

30 蘭

(小倉彩)

①かこと／はかり／もおなじ野、露にやつる、／藤はかま哀はかけよ

②おなじ野の露にやつる藤袴あはれはかけよかごとばかりも(新編全集③三三二頁)

③同じ野原の露で衰えた藤袴(あなたと同じように祖母の大宮の死を悼む私)をかわいそうだと思つてください。ほんの少しでも。

④夕霧が玉鬘たまむすに蘭(藤袴)の花を渡して、自身の胸中を訴えた和歌。夕霧は玉鬘を異腹の姉と思つていたが従姉弟いとこと知り、恋心を抱くようになる。

⑤夕霧が、懸想している玉鬘と御簾越しに話している。夕霧の手には藤袴が見えず、写し崩れ(転写の過程で描き落した)か。(新編全集③三三二頁)

⑥この場面では二人とも喪に服して、玉鬘の小桂は黒色に見え

るが、夕霧は喪服ではない。冠は垂縷すいゑいで文官であることを示すが、物語では服喪で卷縷けんゑいとする。屏風には群れて飛ぶ六羽の鶴が描かれ、裏側は七宝繋ぎ文様。

31 御幸(第二九帖)

(小倉彩)

①をしほ山／みゆきつもれる／松原に／けふばかりなる／あとやな／からむ

②をしほ山みゆきつもれる松原に今日ばかりなる跡やなからむ(新編全集③二九三頁)

③小塩山の松原に深雪みゆきが積もつているように、これまでにも御幸みゆきが行われてきましたが、今日ほど後あとに残る御幸はないでしょう。

④冷泉帝は大原野へ御幸した際、光源氏が物忌で参加できなかったことを残念に思い、使者を遣わして光源氏みゆきに雉二羽を枝につけたものと和歌を届けたとき、光源氏が返した歌。

⑤光源氏が、雉を持った勅使(藏人の左衛門尉)と対面している。(新編全集③二九三頁)

⑥光源氏が座っている畳は縷縷うんげん縁べりで、もとは天皇専用。物語では「雉一枝」とあり、絵では一羽しか確認できない。描かれた使者の冠には綾おいかがついているので武官かと思われるが、冠の後方に垂らした縷は武官の卷縷ではなく文官の垂縷である。この

日は五位・六位の者まで「青色の袍衣、葡萄染の下襲」(新編全集③二九〇頁)を着たが、絵の勅使は下襲を着ず、袍も浅い黄緑色には見えない。

32 梅枝

(小倉彩)

①色も香もうつるはかりにこの春は／花さく／やとをかれすもあらなむ

②色も香もうつるばかりにこの春は花さく宿をかれずもあらなん(新編全集③四一一頁)

③花の色も香りも(あなたの身に)移り染まるほどに、この春は花咲く我が家を絶えず訪れていたきたい。

④薫物競べの後で催された宴で、光源氏邸を弟の螢兵部卿宮が賛美する和歌を詠み、光源氏が唱和した歌。

⑤螢兵部卿宮が光源氏を訪れ歓談しているところに、朝顔の姫君から光源氏が依頼していた薫物と、梅の枝に付けた手紙が届いた場面。(新編全集③四〇五頁)

⑥朝顔の姫君は紺と白の瑠璃の壺に入れた薫物を贈ったが、絵では二つとも同じ色である。そばの白い物は壺を入れていた袋か。奥にいる白の直衣姿が光源氏、手前の薄紅の直衣姿が螢兵部卿宮で、二人の間に梅の枝が置かれている。

(武内真由)

33 藤裏葉

①吾やとの／藤の色こき／たそかれに／たつねやは来ぬ／春の／餘波／を

②わが宿の藤の色こきたそかれに尋ねやはこぬ春のなごりを(新編全集③四三四頁)

③わが家の藤の花が色濃く美しく咲いているこの夕暮れに尋ねて来ませんか、春の名残を。

④藤花の宴を催した内大臣が、夕霧を招待した和歌。歌中の「藤」は雲居雁(内大臣の娘)を暗示し、夕霧との結婚を許す気持ちを含める。

⑤庭の松の木に絡む藤が咲くに合わせて、内大臣が開いた宴の場面。屏風を背に座り顎髭を生やしたのが内大臣、その前に子息の柏木が座り、朱色の杯を持つのが夕霧で、三人とも冠直衣

姿。袖に朱色の露が付いている緑色の狩衣姿は従者で、右手に酒を注ぐ銚子を持つ。(新編全集③四三七頁)

⑥他作品では「頭中将、花の色濃くことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。」(新編全集③四三八頁)を絵画化して、同席する柏木が房の長い藤花の枝を夕霧の杯に添えているが、本図では床に置かれているように見える。

34 若菜上

(武内真由)

①小松はらすゑの齡にひかれてや／野へのわかなも年をつむへき

②小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき  
(新編全集④五七頁)

③若々しい小松原のような孫たちの末永い将来にあやかつて、私も野辺の若菜を摘むように歳を積み重ねていくことができましよう。

④光源氏の四十賀に際して、養女の玉鬘が祝宴を催す。玉鬘が若菜を献上して歌を詠んだときに、光源氏が返した歌。

⑤雪の降る朝、光源氏が手紙を梅の枝に付けて女三の宮に送った場面。白い直衣を着た光源氏は女三の宮の返事を待ちながら、梅の枝の残りを手に持ち、几帳の傍に濃藍の袿姿で座る紫の上に見せている。二人の前には手紙を持つ袿姿の女房がいて、庭には「紅梅」(新編全集④七一頁)が咲いている。

⑥源氏は雪にちなんで「白き紙」(④七一頁)に書き、白梅に付けて女三の宮に送ったが、絵では紅梅を持っている。

(武内真由)

35 わかな下

①恋わふる人のかたみとたならせは／なれよ何とてなくなるなるらむ

②恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なる

らん(新編全集④一五八頁)

③恋しくてせつなく思う人(女三の宮)の形見と違って(猫を)飼ひ慣らししていると、おまえはどういうつもりで鳴く声なのだろうか。

④柏木が女三の宮の猫を手に入れて、女三の宮に思いを寄せて詠んだ歌。

⑤六条院(光源氏の邸宅)での女樂の場面。光源氏は冠直衣姿。その左側に琵琶を演奏する明石の君。三人並んだ女君のうち、奥から順に紫の上が和琴、女三の宮が琴、明石の女御が箏の琴を担当。女御は妊娠中で、脇息に寄りかかり休んでいる。源氏絵では明石の君だけ他の女君たちと離して描き、身分が低いことを表す。簀子(縁側)に座る少年二人のうち、笙の笛は右大臣(鬚黒)の三男、横笛は左大臣(夕霧)の長男。(新編全集④一八六―一九二頁)

⑥物語によると女三の宮は桜襲の細長、明石の女御は紅梅襲の表着、紫の上は葡萄染の小桂、明石の君は萌黄の小桂をまとう。

(遠藤雄太郎)

36 柏木

①猶や／のこらん／たえぬ／思ひの／むす／ほ、／れ／今はとて／もえむ／煙も



②いまはとて燃えむ煙もむすほほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ  
(新編全集④二九一頁)

③今はもうこれで最後と(私を)葬る煙も気が晴れずにくすぶり続け、(あなたを)忘れられない思いの火もやはり残るでしようか。

④柏木が、女三の宮との密通を光源氏に知られたことから病にかかり、自身の死期を悟った時に女三の宮に詠んだ和歌。

⑤女三の宮は柏木の手紙を前に置き、右手に筆、左手に紙を持ち、袖で涙をぬぐいながら返事をしたためている。画面の右下にいるのは、二人の仲を取り持った小侍従(女三の宮の乳母子。伯母は柏木の乳母)。硯箱の中には硯・筆・墨がある。(新編全集④二九二頁)

⑥この場面は春だが庭に紅葉があり、季節が合わない。あるいは春でも紅葉する野村紅葉か。ちなみに『十帖源氏』若菜下の巻に似た図があり、それは出家した朧月夜が光源氏の手紙を読む場面。

### 37横笛

(林田珠加子)

①横ふえの／しらへは／ことに／かはらぬ／を／空しく／なりし／音こそ／つき／せぬ

②横笛の調べはことにかはらぬをむなしくなりし音こそつきせ

ね(新編全集④三五七頁)

③横笛の調べは(柏木存命の頃と)特に変わらないので、(柏木は)亡くなったが、その奏でた音はいつまでも尽きることはありません。

④夕霧が落葉の宮を訪ね、柏木の遺品である横笛を譲られた際に詠んだ和歌。

⑤一条宮(落葉の宮の邸)にて、冠直衣姿の夕霧が譲り受けた横笛を演奏する場面。そばに応対役の御息所(落葉の宮の母)がいて、落葉の宮は御簾の中で姿は見えない。(新編全集④三五二―三五八頁)

⑥物語では夕霧が御簾の前に和琴を押し寄せたが、簾の中にいる落葉の宮は箏の琴を演奏したとある。夕霧が訪れたとき合奏が行われていたので、御息所の横にある楽器もその際に用いられたものか。

### 38鈴虫

(堀内綾花)

①心もて／草のやとりを／いとへ／とも／猶／すゝ虫の／聲そ／ふり／せぬ

②心もて草のやとりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ(新編全集④三八二頁)

③ご自分から(鈴虫の住む)草の家を嫌うけれども、なおも鈴

虫の声が古びないように（あなたは）若くて美しい。

④女三の宮のもとを訪れた光源氏が、鈴虫の音を賞賛しながら出家した宮を惜しんで詠んだ和歌。

⑤光源氏は琴を弾き、尼君たちは関伽坏（仏に供える水を入れる器）を用意している。

⑥「仏の御前おまへに宮おはして、端近はしぢかうながめたまひつつ念誦ねんずしたまふ。若き尼君たち二三人花奉るとて、鳴らす関伽坏の音」  
（新編全集④三八一頁）の折、光源氏が訪れ「琴の御琴」（三八二頁）を演奏する。その楽器は琴柱ことしらがなく七絃であるが、絵に描かれたのは琴柱があり、絃は十本余り見える。二人の女性のうち手前の人は肩の辺りで切りそろえた尼削ぎであるが、奥の人物は尼にしては髪が長い。出家した女三の宮について「御髪は惜しみきこえて長うそぎたりければ、背後うしろはことにけぢめも見えたまはぬほどなり。」（柏木の巻。④三二一頁）と書かれているので、女三の宮であろうか。ただし出家者にしては衣の色が派手であることを考慮すると、女三の宮のあとを追って出家した女房は「十余人ばかり」（三八〇頁）で、そのほかは俗人のまま仕えているので、二人の女性はいずれも女三の宮の女房とも考えられる。国宝「源氏物語絵巻」鈴虫の巻第一図にも、二人の女房が尼と在家とに描き分けられている。

（山田玲菜）

39（夕霧）

①たちいてむ／そらも／山里の／あはれを／そふる夕霧に／なきこ、ち／して

②山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地して  
（新編全集④四〇三頁）

③山里の寂しさをいっそう募らせる夕霧が立ちこめ、立ち去る方向も分からず、（あなたのそばから）立ち去れない心地がして。

④一条御息所の見舞いを口実に、その娘（落葉の宮）のもとを訪れた夕霧が、自分の気持ちを受け入れてくれない宮に詠んだ歌。

⑤一条御息所から夕霧に届いた手紙を、落葉の宮からの恋文と勘違いした雲居雁は隠してしまう。その翌朝、夕霧が手紙を探す場面。夕霧・雲居雁夫妻の子どもたちは人形遊びをしている。奥に見える文台の上には硯箱（中に入っているのは硯と筆か）が置かれている。

⑥物語には「君達のあわて遊びあひて、雛ひなつくり拾すひ据すゑて遊びたまふ、文読ふみみ手習てならひなど、さまざまにいとあわたたし、小さき児こ這はひかかり引きしろへば、（雲居雁は）取りし文のことも思ひ出でたまはず。」（新編全集④四三〇頁）とあるが、絵では夕霧の前にいる。夕霧の目線は妻には向けられず、それとなく

手紙を探しているように感じられる。

(山田玲菜)

40 御法

①むすひをく契りはたえし大方の／のこりすくなき御法なりとも

②結びおく契りは絶えじおほかたの残りすくなきみのりなりとも (新編全集④四九九頁)

③(この盛大な法会であなたと) 結ばれたご縁が絶えることはありません。誰にとつても残り少ない身に、残り少ない法会であつても。

④紫の上が自ら発願して法華経千部の供養を行なった後、死期が近いことを予感して詠んだ歌に対する花散里の返歌。

⑤重病の紫の上を、光源氏と明石の中宮が見舞う場面。光源氏から見て右側が紫の上、左側が養女にした明石の中宮で皆、袖を顔に当て涙を拭いている (新編全集④五〇四頁)。枕元には角盥つのだらひ、その上に置かれたのは水差しか。

⑥当時は親しい人と対面する場合にも几帳を隔てていたが、絵の紫の上は病気であるにも関わらず、几帳から体を出している。これは、その後の「御几帳ひき寄せて臥したまへる」(新編全集④五〇六頁)という記述から、容態が悪くなるまでは几帳から姿を見せていたと解釈したからであろう。

41 幻

(山田玲菜)

①うへてみし／花のあるしも／なき宿に／しらす顔にて／来る鶯

②植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来る鶯 (新編全集④五二八頁)

③(紅梅を) 植えて眺めた花の主人(紫の上) もいない家に、(そのことを) 知らないという顔で来ている鶯よ。

④紫の上遺愛の紅梅に鶯が来ているのを、光源氏が見て詠んだ和歌。

⑤紫の上が亡くなった翌春、螢兵部卿宮が光源氏を見舞いに来て「紅梅の下に歩み出でたまへる」(新編全集④五二二頁)の場面。あるいは光源氏が庭に出て紅梅を眺め、①の和歌を詠じた場面 (新編全集④五二八頁)とも解釈できる。

⑥螢宮が訪れた場面ならば、光源氏は紫の上を亡くした悲しみにくれ、御簾の中に籠つて見えない。

(吉田茉莉)

42 匂宮

①おぼつ／かな／たれにとはまし／いかに／して／しらぬ我身を／はしめも果も

②おぼつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬ我

が身ぞ（新編全集⑤二四頁）

④気がかりなことだなあ。誰に尋ねればよいのだろうか。どのようにして生まれたかも、またどのようになっていくかも分からない我が身であるなあ。

⑤薫の君が、自分の出自に対する不安を募らせて詠んだ歌。

⑥生まれつき不思議なほど風情のある香りを身にまとっている中将（薫の君）に対抗して、兵部卿宮（匂宮）は香りのよい植物に執着した。絵は匂宮が庭の前栽を眺めている様子。（新編全集⑤二七頁）

⑦物語によると匂宮は、秋の草花で世人が愛でる女郎花や萩には興味がなく、菊や藤袴、吾亦紅われもこうのようなかわしい植物を好むと書かれているが、本図には秋の七草である女郎花や萩、桔梗ききょう、薄うすきが描かれている。

（吉田茉以）

### 43 紅梅

①まつうくひすの／とはすや有へき／心ありて風のにほ／はすその、梅に

②心ありて風のにほはす園の梅にまづ鶯のとはすやあるべき（新編全集⑤四九頁）

③思う心があつて、風が匂いを運んでくる園の梅に、まず鶯が訪れないことがあるだろうか。いや、ないだろう。

④紅梅大納言は庭先に咲いた紅梅を見て亡き光源氏を思い出し、その忘れ形見の匂宮に自分の思いを詠んだ歌。我が娘を梅花に、匂宮を鶯になぞらえて、二人の結婚を熱望している。

⑤大納言は紙と筆を持ち、前掲の和歌をしたためている。その手紙を匂宮に渡すよう、前に座る息子の若君に言づける。（新編全集⑤四九頁）

⑥物語では紅梅大納言が書いたのは「紅の紙」とあるが、絵では白い紙。

（吉田茉以）

### 44 竹川

①竹河のはしうち出し一ふしに／ふかきこゝろのそこはしりきや

②竹河のはしうち出でしひとふしに深き心のそこは知りきや（新編全集⑤七四頁）

③『竹河』の出だし「竹河の橋」を謡ったその一節に、私の深い心（玉鬘の姫君への思い）の底はお分かりになったでしょうか。

④玉鬘邸で薫たちが催馬楽の「竹河」を謡った翌朝、薫が玉鬘の息子に言づけた歌。

⑤三月に玉鬘の姫君ふたりが庭の桜を賭けて碁の勝負をして、烏帽子に直衣姿の藏人少将（夕霧の子息）が垣間見る場面。部

屋の奥に碁盤と碁石、中央に玉鬘、端に出て桜を眺めるのは姫君たち。庭で桜花を拾うのは勝った中の君に仕える童女。(新編全集⑤七九〜八一頁)

⑥物語には大君は桜襲の細長に山吹襲の袷、中の君は薄紅梅襲(⑤七五頁)とあるが、絵の衣装は異なる。

(井上瑞月)

45橋姫

①あと／たえて／心／すむ／とは／な／けれ／とも／よを／宇治／山に／やとを／こそ／かれ

②あとたえて心すむとはなけれども世をうち山に宿をこそかれ(新編全集⑤一三〇頁)

③(私は)俗世と縁を断って悟りすましているというわけではありませんが、この世を憂きものと思い、この宇治山に仮住まいをしております。

④宇治の山荘で暮らす八の宮(光源氏の弟)が、弟の冷泉院に返した歌。

⑤宇治を訪れた薫が、八の宮の姫君たちを垣間見る場面。画面の左上に有明の月が浮かび、二人の姫君が演奏中で、簀子に女房が控える。(新編全集⑤一三九頁)

⑥父宮は「姫君に琵琶、若君に箏の御琴を」(新編全集⑤一二四頁)教えたとあるが、現代では姉妹の容貌や性格に重点を置

き逆に解釈して、中の君は琵琶を前に置き右手に撥を持つ。大君は箏の琴の上に前かがみになって演奏すると物語には書かれているが、絵では箏の琴を確認できない。また物語では薫は「竹の透垣の戸を、すこし押し開けて」(一三九頁)見たとあるが、絵には小柴垣が描かれている。

(乾早紀)

46椎本

①山さくらにほふあたりに尋ねきて／おなしかざしを折てけるかな

②山桜にほふあたりにたづねきておなじかざしを折りてけるかな(新編全集⑤一七四頁)

③山桜が美しく輝く(姫君たちの住む)辺りを訪ねて来て、(私も姫君たちと)同じ山桜の花を挿頭に手折ったことだなあ。(美しい姫君たちと同じ皇族である私と、ぜひ親しくして頂きたいものです)

④匂宮が桜の花の枝に付けて、宇治の姫君たちに贈った歌。「同じかざし」に、匂宮も姫君たちも皇族であることを響かす。

⑤歳の暮れ近く、山の阿闍梨が宇治の姫君たちに炭などを贈る場面。「山人」が薪をかつき、阿闍梨の使いである白衣の僧が女房から返礼の品を受け取る。女房が差し出す入れ物の中の物は、桜の花弁のように見えるが、「綿絹」(綿や絹糸を束ねた

摘綿<sup>つみわた</sup>の写し崩れか。(新編全集⑤二〇四頁)

⑥八の宮の生前は阿闍梨から炭を贈られた礼として、綿衣<sup>わたぎぬ</sup>(防寒用の綿入れの衣服)などを贈っていた。その習慣を姫君たちも引き継いだ。

(上久保咲穂)

47総角

①ところによりも／あはなむ／こめ同し／をむすひ／契り／に  
なかき／あけまき

②あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ  
(新編全集⑤二二四頁)

③(姫君たちが仏前に供える名香<sup>みよしう</sup>の五色の糸の)総角<sup>あけまき</sup>結びに、  
末長く変わらない契りを結びこめて、(幾重にも糸が)同じ所  
により合うように、いつまでも一緒にいたいものです。

④宇治を訪ねた薫が、八の宮の一周忌の準備をしている大君に  
思いを伝えた和歌。

⑤烏帽子に直衣姿の薫が、几帳(物語では屏風)の向こうにいる  
大君に迫るが、扇で顔を隠して拒まれる場面。ただし物語で  
は扇は記されず、また絵では喪服姿に描かれていない。奥の女  
房は大君に付き添うように言われていたが、御前を退いてい  
る。御簾は総角結びで括り留められている。(新編全集⑤二三  
四頁)

⑥この絵の図様は、匂宮が初めて浮舟を見つけて言い寄る場面  
(東屋の巻)に似る。「衣の裾をとらへたまひて(中略)扇をさ  
し隠して、見かへりたるさまいとをかし。」(新編全集⑥六一  
頁)。また庭の描写も、「色々に咲き乱れたるに、遣水のわたり  
の石高きほどいとをかしければ、端近く臥してながむるなりけ  
り。」(新編全集⑥六〇頁)とあり本図に合う。

(小夏珠々花)

48早蕨

①此春は誰にかみせむ／なき人のかたみにつめる／峯のさ／は  
らひ

②この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰の早蕨  
(新編全集⑤三四六頁)

③(姉君までもが亡くなった)今年の春は、いったい誰に見せ  
ればよいでしょうか、亡き父宮の形見として筐<sup>かまな</sup>(籠)に摘んで  
(阿闍梨が贈って)くださった峰の早蕨を。

④中の君が阿闍梨に詠んだ御礼の歌。

⑤中の君は阿闍梨の手紙を読み、前に置かれた籠には贈られた  
蕨が入っている。

⑥物語には「蕨、つくづくしをかしき籠<sup>かまな</sup>に入れて」とあるが、  
絵は蕨だけで「つくづくし」(土筆<sup>つくし</sup>)は描かれていない。

(松川来未)

49 宿木

①今朝の／問の／色にや／めて／む／をく／露の／きえぬに／かゝる／花／と／みる／く

②今朝のまの色にやめでんおく露の消えぬにかかる花と見る見  
る（新編全集⑤三九一頁）

③今朝の束の間の（朝顔の）色香を愛でるとしようか。（花に）  
置く露が消えない間に、このような（儂い）花と知りながら  
も。

④薫が庭の朝顔の花を見て、亡き大君や匂宮と結婚した中の君  
を思つて詠んだ和歌。

⑤帝と薫が碁をうっている場面。帝は顔を描かないことが多い  
ので、奥にいる人物が帝、手前にいるのが薫である。（新編全  
集⑤三七八頁）

⑥碁に負けた帝は夕霧に褒美として、庭に咲く菊の花を与える  
が、それは娘の女二の宮との結婚をほのめかしている。

（新庄菜生）

50 東屋

①みし人のかたしろ／ならば身にそへて／恋しき人の／なて物  
にせむ

②見し人の形代かたしろならば身にそへて恋しき瀬々のなでもものにせむ  
（新編全集⑥五三三頁）

③（浮舟が）昔（私が）会った人（大君）の身代わりならば、  
いつもそばに置いて、恋しい人（大君）の思いを移して流す撫  
で物（祓えに用いる身代わりの人形）にしましょう。

④浮舟を紹介した中の君に対して、薫が亡き大君を偲ぶ思いを  
詠んだ歌。

⑤白い紙の上に硯箱が置かれ手紙を読む場面だとすると、中将  
の君（浮舟の母）から届いた手紙を中の君が読んでいるところ  
（新編全集⑥三九頁）か。控えているのは中の君の女房で、か  
つて中将の君と同僚であった大輔か。ただし『源氏物語絵詞』  
には採られていない。

⑥屏風には太鼓橋（宇治橋か）と柳が線描されている。和歌の  
第四句が①「恋しき人」と②「恋しき瀬々」と異なるが、『源  
氏物語大成 校異篇』『源氏物語別本集成』所収の伝本はすべ  
て②と同じ本文である。

（鶴岡里菜）

51 浮舟

①年ふともかはらむものかたちはなの／こしまの崎に契るこ、  
ろは

②年経かともかはらむものか橋の小島のさきに契る心は（新編全  
集⑥一五一頁）

③長い年月が経ったとしても、変わることがあるでしょうか。

この橋の小島の崎で、(あなたとの未来を) 約束するわたしの心は。

④匂宮が浮舟を宇治の屋敷から連れ出し、小舟で宇治川を渡っているときに、橋の小島を見て詠んだ歌。常緑樹である橋の葉に、浮舟への変わらない愛情を喩えた。

⑤薫の命令で宇治の屋敷が厳重に警戒され、訪れた匂宮は屋敷に入らずにいる場面。直衣姿の匂宮は浮舟との仲を手引きした侍従と話している。垣根の外にいる匂宮の従者は三人とも狩衣で、馬の近くにいるのは時方か。(新編全集⑥一九〇頁)

⑥物語に「山がつの垣根のおどろむさの蔭に、障泥あふりといふものを敷きて下ろしたてまつる」(新編全集⑥一九〇頁)とあるように、匂宮は障泥あふり(はねあがる泥を防ぐために、馬の両脇や腹にかけるもの)の上に座っている。

(山本瑞生)

52蜻蛉

①ゆくゑも／しらす／きえしかけろふ／有とみて手には／とられすみれは又

②ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらす消えしかげろふ(新編全集⑥二七五頁)

③そこにあると見ても手には取られず、見ているうちにまた行方もわからず消え失せてしまった蜻蛉よ。

④夕暮れに飛ぶ儂い蜻蛉に、宇治の姫君たち(亡き大君、匂宮と結婚した中の君、行方不明の浮舟)を重ね追想して詠んだ薫の歌。

⑤女一の宮が住む西の渡殿で、薫が女房たちと会話に興じる場面。薫は冠直衣姿で、前に和琴を置く。真ん中で箏の琴に手を添えているのは中将のおもとか。(新編全集⑥二七一頁)

⑥「蜻蛉」はトンボの別名。またはトンボに似た昆虫で、成虫後の生存がごく短いことから、儂さの象徴とされる。「蜻蛉の夕べを待ち、夏の蝉の春秋を知らぬもあるぞかし。」(『徒然草』第七段)。

(山下菜々子)

53手習

①あたし野、風に／なひくなをみなへし／我／しめゆ／はむ／道／遠く／とも

②あだし野の風になびくなをみなへし女郎花をみなへしわれしめ結ゆはん道とほくとも(新編全集⑥三二三頁)

③化野あだしのの風になびかないでください。女郎花よ、わたしが(風を防ぐために女郎花の周りに)しめ縄を張ろう。(京からの)道は遠くても。―ほかの浮気な男になびかないでください。浮舟よ、わたしが夫になろう。(京からの)道は遠くても。

④中将は妻を亡くしてからも姑の尼君を見舞い、尼君が世話を



している浮舟を見て送った歌。

⑤入水を決意したが、助けられた横川の僧都そうずに懇願して出家した浮舟が室内にいて、手習をしている。

⑥浮舟は出家して、六尺ほどもあつた美しい髪（三三四頁）を肩につくほどに切りそろえてあまそ尼削ぎになった。画面の左奥にあるのはかほひ笈で、自然の湧き水や小川から水を引くのに用いる。

（葉山綾）

54夢乃浮橋

①法の師とたつぬる道をしるへにて／おもはぬ山にふみまとふ哉

②法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな  
（新編全集⑥三九二頁）

③（僧都を）仏法の師と申って訪ねてきた道を、（あなたへとつながる）道しるべとして、私は思わぬ（恋の）山に踏み迷っているなあ。

④行方不明になった浮舟が出家して小野の里にいて、と耳にした薫は前掲の和歌を手紙に書き、浮舟の弟である小君に託す。

⑤小君が浮舟の住まいを訪れ、尼君を介して薫から言付かった手紙を浮舟に渡す。絵では浮舟が手紙を読み、尼君が小君の相手をしている。小君のそばには、赤い糸が付いた笠が置かれている。

⑥物語では手紙を読んだ浮舟は、「うち泣きてひれ臥し」（三九二頁）だが、絵では明るい表情をしているようにも見える。これは源氏物語絵が婚禮調度として詠えられたため、陰鬱な表現を避けたのであろう。

（佐竹真生子）

#### 〔付記〕

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二二年度）、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12665、二〇二〇～二〇二二年度）における研究の一部であり、また宮廷文化研究センターの事業の一環である。